

「本校の教育相談」実践のための学校体制づくり

風 間 弘 文^{*}

I はじめに

生徒にはいろいろな悩みがある。学業、性格、進路、友人関係とさまざまである。その悩みは、両親に、兄弟に、友だちに、先輩に、そして、教師にうちあけられ相談される。相談によって、生徒一人一人の悩みが、生活上の障害がとり除かれていく。悩みが、障害が除去されれば、気が楽になり、そのことによって、学校生活が楽しい、はり合いがもてる、全力投球ができる毎日になる。そのような生徒にしたいと思っているし、そうしなければならないと思っている。

はたして、実態はどうであろうか。生徒も教師も忙しい毎日である。6校時がすむと、部活動だ、クラブ活動だといって運動場へ駆けていく。確かに200余名の生徒の中には、授業中ぼうっとしていて学習できない生徒もいるし、体の具合のすぐれぬまま体育部活動に参加する生徒もいる。

「生徒一人一人を大切に作る指導」それは、どうしたらできるのか。職員間で話合ってみた。結局、教育相談を計画し、実践してみたらということになった。それには、まず、どんな悩みがあるのか。そして、どんな悩みを相談したいと思っているのか。このような実態にたって、教育相談をしてみよう。この話がもち上がり、職員間の話題になったのが昨年度三学期であった。

行なってきたけどまだ日も浅い。教育相談のなんたるかも知らない。ましてや実践の方法等探索中である。4月から今日まで、本校なりに取り組んできた教育相談をさらけだし、ここに、その跡を振り返ってみたいと思う。

II 相談実施前の調査の感想

学年はじめの教育相談に関する調査によれば、第1の質問は「相談するとき、だれに相談しているか」であったがその順位が、友だち、次いで、兄や姉、母、そして、父、先輩、最後に先生ということであった。第2の質問、「相談したいことがありますか」ではその答として、1年生90%、2年生60%、3年生80%の結果を得た。第3問「相談したいことの内容について」に関しては、予想した通り学習上の問題が70%にも達していた。次に多いのが進路上の問題であった。第4問の「どんな内容のことなら先生に話しやすいか」という答欄には白紙が多い。それでも「勉強方法がわからない」とか「将来どんな職業につけばよいのか」性格上の問題で「仕事にすぐあきるのが」「協力的でない」「責任感がないといわれる」とかで「どうしたらよいのか、悩んでいる」という調子の書き方である。

感想として、第1の質問では、教師が皆無にひとしいことに対する驚きである。「相談すること」をどんなふうに感じているのか。今日学校にあった1日の出来ごとを、学校の帰り道友だちどうし話している。そんな風景を想像した。教師は、生徒にとって、気やすく話しかけたり、相談できない存在なのか

も知れない。また、これまで困ったことで教師に相談した経験がないのだろうか。第2の質問では、相談したい生徒が大変多い。1年生では、少し困った程度のものを相談事項としてとらえたのだろうし、2年生では、困っていることもさほど相談ごととは思っていないのだろう。3年生は、問題によっては、生徒によって、相当真剣に考えてはいるが、その深さをどの程度につかまえば、相談事項になり得るものか迷いがあったものと感じている。第3問は、生徒の当面する最も大きな悩みである学習上のことである。進路については、やはり3年生に多いようである。第4問は1問と関連して「先生に対して」という設問に心理的な抵抗を感じたのではないと思われる。表現も抽象的で一般的である。誰が見ても聞いても無難なように書いてある。もう少し具体的に切実な問題を書いてくれればと思った。

全体の印象として、次のことが言える。新学期に入って間もないころのアンケートであり、教育相談の経験もない生徒であるがため、「教育相談」とは「どんなことを書けばよいのか」「どんなことを聞かれるのか」といったことで、生徒の教育相談に対する関心と呼んだ程度でしかなかった。その上、自分のことを紙に書いて提出することに抵抗があったと本音をはく生徒もいた。この本音を肯定し、前述したことの中に「教師は生徒の相談者に選ばれていない」ということを認めたら、教育相談は全く成立しなくなる。とはいえ、このアンケートをきっかけに、生徒も教師も教育相談の何んたるかに関心がよせられたことは収穫というべきであった。

教育相談は、まさにこれから始まろうとしているんだという実感であった。気張らず、時間をかけてゆっくりと、みんなの先生方が、これまで以上に生徒一人一人に目を配り、気を配り、心を配ってやっていこう。そして、心と心の通い合い、ふれ合い、結びつきを大切にしていこう、こんなことを心に誓い約束して教育相談はスタートした。

Ⅲ 指導体制

1. 組織と役割

(表1) 組織と役割

分 掌	内 容
相談主任	相談の年間計画、相談技術の研修、実践発表会企画
生活部	生徒指導の年間計画、問題行動生徒の指導、月間生活目標と実践事項設定
保健部	健康指導、健康状況記録、健康相談
学習部	学習成績報告、学習態度等観察記録
部・クラブ	部活動状況交換、クラブの活動状況交換
進路部	各種テスト実施、進路希望等の記録
学級担任	主として相談カード記録、相談活動、家庭連絡

相談主任の役割は、(表1)の通りであるが、月1回程度プリントに相談の重要性や相談の方法、技術等の内容を解説し、教育相談学習の参考として職場に配布する。いわく「赤中相談だより」というものである。全体研修等も年3回ほど計画し、その実践推進者となる。なんといっても、毎週金曜日に行われる定期教育相談に意をもちいる。

学級主任は、相談活動の実践者である。例えば、学級担任が生徒から健康上の問題をうちあけられれば、保健主事や養護教諭と連絡をとる。養護教諭は専門的立場で、健康相談なり、健康指導なりを学級

担任を通して行っていく。もちろん、必要によっては保護者に報告をする。教育相談のルールの一つに秘密保持があると思うが、時に指導の資料として、関係職員に報告し協力を求めるようにする。

2. 相談時間の位置づけ

毎週金曜日の放課後、いかなる教育活動にも優先して時間確保に努めている。放課後活動は（表2）の通りである。最低学期1回全学級生徒に定期相談を行う計画である。定期相談は、呼出し相談、チャンス相談、ひいては自発相談が活発になれば、年度途中においても徹廃するとまで話し合っている。

（表2）放課後活動

曜	活 動 内 容
月	部 活 動
火	学 級 づ く り
水	職 員 研 修 , 部 活 動
木	自 主 活 動
金	教 育 相 談
土	放 課 後

3. 相談室の設置

普通教室は生徒の出入りが多い。特別教室を使用している状況である。相談室もあるのだが、もっぱら、相談主任の専用室である。また、金曜日以外の呼出し相談に、活用されている。特に、校長室は、3年生がグループで、学校長と話し合う場所として活用される。2学期から3学期全般に、進路等を中心に2～3人程の生徒が昼食時間を利用して、話を聞いたり、相談したりしている。

4. 職員研修計画

相談部として、次の研修事項を計画した。

- 相談内容と相談の観点設定 月1回 ○ 運営面の諸問題 必要に応じ相談部会
- 面接の情報交換 1学期1回 ○ 教育相談だより 月1回
- 面接技術の研修 1学期1回 ○ 逐語記録 全学級提出、冬休みあけ提出

相談部会は、本年度特に設定し、相談主任と各部主任とで構成する。全体研修は、授業研修会が月1回もたれ、相談研修会もそれと並行して行う。実際には、実践上の問題点等の話合いでおわっている。

5. 教育相談計画

（表3）定期相談題材

月	1 年	2 年	3 年
4	わたしの不安と希望 ○ 中学校に入ってから ○ 聞きたいこと、話したいこと	わたしの悩み ○ 学習上、性格上の悩み ○ 悩みの克服	リーダーとしての自覚 ○ 最上級生になっての感想 ○ 学習計画
5	生活目標をしっかりとてよう ○ 今したいこと ○ 目標実現の計画	生活目標をしっかりとてよう ○ 計画の実践 ○ 努力事項	生活目標をしっかりとてよう ○ 生きがいのある生活 ○ 初志貫徹
6	強い心と体をつくろう ○ 部活動の感想 ○ くじけぬ心、その経験	心の友をつくろう ○ 心の友について ○ 広い心	静かに自分をみつめよう ○ 生き方について ○ 自分のもっとも大切なもの
7	夏休みの計画をたてよう ○ 休みにしたいこと ○ 生活設計の樹立	夏休みの意義 ○ 積極的な夏期利用 ○ 読書の計画	夏休みの積極的利用 ○ たくましくくじけぬ心 ○ 趣味、余暇の利用

9	責任をもって係の仕事を進めよう ○自分の役割 ○人間関係	検査の結果と私 ○私の長所、短所 ○好きな科目、きらいな科目	係と責任 ○生徒会関係 ○上級生の役割
10	進路について考えよう ○将来への夢 ○進路学習の感想	私をみつめる ○私の心身 ○日頃不満に思っていること	進路の決定 ○希望の確定 ○自分をとりまく人の意見
11	進路の計画 ○志望と学校生活 ○身近な職場についての感想	計画的なしごとの進め方 ○テレビ番組、誘惑 ○1日の生活	あせりと不安 ○学習方法の改善 ○着実な実践
12	自分の特色 ○人はみんなよいところをもつ ○人に学ぶ	職業観 ○職業選択の理由 ○職業観	生きる目的 ○進学の意味 ○人に学ぶ
1	新年にあたっての抱負 ○夢を語る ○私の好きなことば	勉強のしかた ○学習上の悩み ○不得意科目の克服	希望と現実 ○悩みの克服 ○努力の尊さ
2	家業とわたし ○父母のくらし ○働くことの意義	尊敬する人 ○身近な人で ○経験の中で	学習のまとめ ○進学、就職の準備 ○後輩に残すことば
3	先輩の意見への感想 ○学習についての感想 ○中学校でやらねばならぬこと	進路計画の検討 ○計画の修正 ○上級生になる心構え	心身の健康 ○受験期の健康 ○新しい生活の心構え

相談の主訴は、生徒一人一人によって違う。教育相談事項は指導事項と違って、題材設定表などできかないはずである。しかし、組織的・計画的に、毎週1回の定期相談実施となれば、なにか話合いの観点なり、話のきっかけをつかむ材料が必要であろう。こんなことを考慮して作成したのが(表3)である。学級指導や学級会活動題材に合わせ作成したものである。

ついでに、相談記録カードに若干ふれてみたい。面接の都度、自由に記述する形式のものである。生徒には予告しておき、気のついた事項は相談しながらメモしていく。もちろん、日常観察した事項も自由に記入してよいことになっている。教務室に保管しておき、いつでも、だれでも利用できる。ちがうページには、保護者氏名、家族構成、家庭環境、学習の記録、進路希望、趣味、特技、諸検査記録の記載がある。一目でその生徒の姿がわかるようになっている。3年間使用されるので、このカードによって、生徒の成長の様子をうかがい知ることができる。

Ⅳ 実践の一端

1. 職員研修記録の中から

○4月当初第1回の全体研修会を行った。相談主任が、本年度の努力事項に「教育相談の実践」を取り上げた理由、教育相談が教育活動で重視されるわけ、実践の具体化について、組織、時間、場所等のことにも言及する。その中で、2～8の教師から次のような発言があった。「ことさらに、教育相談というものを取り上げなくとも、班ノートや我々の日常観察で生徒理解はできるのではないか」「教育相談では、一体どんなことを生徒に話せばよいのか。問題のない生徒、問題をもたない生徒に教育相談なるものが必要であるのか」「呼び出しをしても、悩みもなにもない生徒にどんなきっかけで、なにを話させ

ればよいのか見当もつかぬ」「学級担任にやれというが、いつも叱ってばかりいる。教育相談のときだけに、やさしい声をかけろといっても無理だ」「相談のしかたがわからない。非指示的相談ということがいわれているが、生徒の発言をまっているのは、時間の浪費である。学校の実情にあわないのではないだろうか」「全生徒を対象にするのではなく、行為行動に問題があれば、その生徒だけを対象に相談すればよいではないか」等みんなよい意見ばかりである。とにかく、これらの発言を聞いていると、教育相談は、問題をもつ生徒だけにやればよい。相談のしかたがわからない。非指示的相談で生徒の行為行動がなおせるものだろうか。また、教育相談のときだけ生徒に接する態度をかえろといっても無理である。あれこれと話はつきない。研修がすんなり入って、すんなり抜ける。これでは本ものの研修たり得ない。大いに議論し、もり上がったのは、これからの相談実践に役立つだろうと内心喜びで一ぱいだった。

○5月第2回の全体研修をもった。学業上の問題、集団適応、個人的適応、健康・安全、進路ではどのような相談項目があげられるか。また、どんなことを相談すればよいのかの要望に答えるため、学級指導、学級会活動、学校行事と関連づけて、相談題材等を討議した。相談は「本来生徒がある悩みを訴えてきて、初めて成立するものではないか。個別の悩みなど予想して、計画化すること自体がおかしい」という発言もあったのだが、それに反論して、「学級指導を本ものの指導にするためには、個別指導にまで導く必要がある。そのためには相談題材の設定は必要である」との発言や考え方の職員が多かった。

○6月第8回の研修は、相談のしかたを2組ほど実習した。1組は、まるで教え指導するというカウンセラーの態度であった。主訴は「英語の学習法を教えてほしい」というものであった。結局学習法は自ら体得するものなりとの結論であった。我々が相談するとこのタイプになりやすい。大方の職員が同調した。もう一組は、来談者の訴える悩みに、静かに耳を傾けてうなずき聞いてやるものであった。このカウンセラーに対しては、指導しない、教えてやらない、なんのための相談かということの批評が多かった。

○7月には、「相談の心構え」について、相談部で次のような説明をした。生徒の人格を尊重すること、指導態度を捨てること、聞き上手になること、がまんして結論をだすな、冷静な洞察力が必要、生徒自ら問題を解決する態度を大切にする、相談の時間は有限であるということであった。

○9月の研修は、逐語記録を作成し、教育相談研修をする。みな、よくしゃべり、よく教え、よく指導し、生徒の発言はあまりきこえない。これも体験を通してながら自分自身の態度を反省するに役立った。沈黙がいかにつらいことであるかの反省が多かった。

2. 教育相談を受けた生徒の感想

「教育相談で、正直いって何を言えばよいのかわからなかった。先生の言う通り聞くだけだった」その内容は「君、最近〇〇教科の成績が下がったが、どんな勉強法をしているのか、何時間しているのか、テレビはどれくらい見ているのか、よく見ているテレビ番組は」とかを聞かれた。まさに一方的に聞きだされ、調査されているといった感じであったと述べている。次に、進路問題で相談した生徒は次のようにも言った。「〇〇高校進学だが、この間のテストはクラスで何番である。特に〇〇教科はよくないもう少し努力してくれないと、君も先生も困ることになる。よく考えて一生懸命勉強しなさい」と伝え

てくれた。このような相談が全部ではないが、なにか説教されている感じで、あまり進んで相談したいという気持ちになれないということであった。生徒の中には「君は、学級の係をまじめにやっているが責任感があってよろしい」とほめられたといって喜んでいる者もいた。一年生の生徒は「先生、今日の教育相談は、何番から何番までやるのですか。〇〇君は家に用事があって、早く帰りたいといっています」と催促してくる。その生徒に廊下で声をかけ、「どんなことを相談したいの」というと、「先生のところへ行ってみなければわからない。多分、この間書いて提出した生活目標について聞かれるのではないか」という。まだまだ本ものの教育相談はできこないのではと心配になる。それでも4月や5月ころと比較し、生徒や先生の会話の中に、実践の中に教育相談が抵抗なく入っているように感じる。

私も特殊学級2～3人の生徒と3～4回教育相談を行った。できるだけ成績等にはふれないで、「どんな仕事をしたいのか」「どんなことに興味をもっているのか」「家へ帰ったらどんなことをして遊んでいるのか」ごく日常的なことがらについて聞くようにした。このことが彼等とよい人間関係を作ったのか、廊下で、ときに教務室にまで入ってきて、「教育相談」をいつ行うのか。どんなことについて話するのか等聞きにくる。彼等特殊学級生徒にとっても私にとってもうれしいことである。思うに、彼等なりに自分に対するプライドもあり、結構話かけてやれば人なつこく明るい生徒のようである。そしてすじ道の通った話もしてくれる。ただ、将来の進路をたずねると、自分の能力、学力を正しく捕えていないためか将来に描く進路は大きい。普通学級担任の教師の知らない特殊学級生徒に対する理解を得た。もとより教育相談が、生徒理解の一手段だけに終ってはならないことは承知しているのだが。

先生方も近ごろでは、「教科書を通して見る生徒とはだいぶ違った生徒を発見した」とか、「これまで声をかけても返事すらできなかった生徒が、わりあい明るく冗談さえいえるようになった」また「すぐ叱りつけたのが、生徒の事情をきいて、仕事ができなかった理由を聞くようになった。大分気が長くなりました」という教育相談の功罪の功を説く先生もでてきた。よいきざしがみえだしてきた。

V おわりに

急な坂道に重い荷車を押している感じである。力をだして、大勢で押し上げようとするのだが、すこしも車は坂道を登ってくれない。少しは動いて進んでくれているのだろうか。手をはなせば、車は坂道をころげ落ちもとの所へもどってくる。私たちが行っている「教育相談」もこの「坂道の荷車」なのだろうか。それでも動かない荷車は、4月よりは5月というふうに、ほんの少しずつではあるが石ころやくぼみを縫って、つかえあえいで停止しないで進んでいる。

私たちは、子どもにあれもこれもと要求し欲ばりすぎているのだろう。学力も、体力も、徳力も教え込み指導しようと思っている。これが教育だと思い込み信じているのである。

「一人一人にふれ合い、みつめ合い、はなし合い、心を聞き合いをする教育」これが「一人一人を大切に指導、教育」ではないか。このような考えの中にこそ教育の本ものがあるような気がする。

教育相談は、「子どもを本気で思う心」の中にはぐくまれるものなのだろう。これからは、教育相談に、今まで以上に本気になって取り組んで行きたいと思う。